

## あとがき

筆者が小学校低学年の頃だから昭和24,5年頃のことと思うが、兄たちに連れられて北大路通りあたりの高野川に水遊びに行った。まだ魚とりは無理で、小石でダムを作ったりして遊んでいた。水はきれいでも川底は白砂と小石で汚れはなかった。帰る前には、平たい石を水の上に投げて何回もジャンプさせる水切り遊びを競って遊んだ。高野川は校区の範囲内であったので、友達なども処々でそれぞれ遊んでいた。しかし、高野川は少しずつ汚れだし水遊びに不向きになっていった。その後、染色工場の排水などで激しく汚濁した高野川も今は水質もきれいになったが、子どもたちの遊ぶ姿は見られなくなった。水難事故を防ぎながら、子どもたちが川で自由に遊びに興ずる場ができると、川への親しみも理解も深まると思う。智恵を出し合って考えてみたいものである。

(公社) 日本水環境学会関西支部川部会 / 勝矢淳雄

## 参考文献

- ・井上 靖(1966)「昨日と明日の間」、角川文庫、緑216-25、角川書店
- ・大原観光保勝会ホームページ: <http://kyoto-ohara-kankouhosyoukai.net/index.html>
- ・京都府(2010)「鴨川河川整備計画」
- ・京都府京都土木事務所(2001)「京都府京都土木事務所管内図」
- ・黒川道祐著、宗政五十緒校訂(2002)「雍州府志(近世京都案内、上)」岩波書店
- ・国際日本文化研究センターホームページ: [http://tois.nichibun.ac.jp/database/html2/waka/index\\_creator.html](http://tois.nichibun.ac.jp/database/html2/waka/index_creator.html)
- ・国民図書株式会社編(1976復刻)「校註国歌体系」、第22巻(夫木和歌抄下)、講談社
- ・清水孝之校注(1985)「與謝蕪村集」、新潮日本古典集成(第32回)、新潮社
- ・竹山道雄(1983)「詩仙堂」、林健太郎、吉川逸治監修「竹山道雄著作集8(古都遍歴)」、福武書店
- ・日本後紀: <http://www.013.u-pg.jp/wata/rikkokusi/kouki/kouki.html>
- ・舟橋聖一(2007)「花の生涯(上)、(下)」、祥伝社
- ・古市貞次編(1973)「高野本平家物語(一)」、笠間書院: <http://www.j-texts.com/heike/takano/hthanrei2.html>
- ・山本四郎(1995)「京都府の歴史散歩(中)」、山川出版社

## 既刊の紹介

- ・源流を行く 編 『名張川』(2013) 『木津川上流』(2013) 『高時川・余呉湖』(2014) 『桂川・由良川源流』(2014)
- ・おうみの川 編 『赤野井湾と流入河川』(2013)
- ・みやびな川 編 『白川』(2010) 『鴨川・明神川』(2012) 『琵琶湖疏水』(2013) 『京の川』(2014)
- ・歴史とロマンの川 編 『瀬田川・宇治川』(2010) 『保津川・桂川』(2011) 『茶川』(2011) 『猪名川』(2013)
- ・なにわの川・庶民の川 編 『東横堀川・道頓堀川』(2011) 『恩智川・生駒の川』(2012) 『中河内の川』(2013) 『大川と大阪市内河川』(2013)

(公財) 琵琶湖・淀川水質保全機構  
〈企画編集〉(公社) 日本水環境学会関西支部川部会  
(一社) 近畿建設協会

琵琶湖・淀川 里の川をめぐる  
～ちょっと大人の散策ブック～ 〈みやびな川編〉

### 高野川 (Takanogawa)

(発行) 平成27年2月

(発行者) 公益財団法人 琵琶湖・淀川水質保全機構  
〒540-0008 大阪市中央区大手前1-2-15 (大手前センタービル4F)  
TEL. 06(6920)3035 FAX. 06(6920)3036  
〈ホームページ〉 <http://www.byq.or.jp/>  
\*散策ブックはホームページ上で閲覧することができます\*

(公財) 琵琶湖・淀川水質保全機構では、寄付へのご協力・賛助会員のご入会をお願いしております。戴いた会費・寄付金は、当機構を通じ琵琶湖・淀川流域の水質保全に活かされます。詳しくは、ホームページをご覧ください。

# 琵琶湖・淀川 里の川をめぐる

～ちょっと大人の散策ブック～

みやびな川 編

## 高野川

(Takanogawa)

(公財) 琵琶湖・淀川水質保全機構  
(公社) 日本水環境学会関西支部川部会  
(一社) 近畿建設協会



## 「琵琶湖・淀川流域散策ブック」のねらい

(公財)琵琶湖・淀川水質保全機構と(公社)日本水環境学会関西支部川部会、(一社)近畿建設協会は、大都市圏の川を水質という側面だけではなく総合的に把握し、その機能を再評価するために川部会が2001年より行ってきた活動の成果を基礎に、「琵琶湖・淀川流域散策ブック」をまとめることになった。

この散策ブックは、琵琶湖・淀川流域の河川を散策する時に気軽に携帯できるガイドブックを意図して作られており、対象河川の概要はもとより、流域の見どころ、名水や滝、水質や生物、その川にまつわる興味深い話などが、豊富な写真や地図を用いて解説されている。

散策ブック全体は、「源流に行く」、「おうみの川」、「みやびな川」、「歴史とロマンの川」、「なにわの川・庶民の川」の5編で構成され、それぞれ5、6リーフレットからなる。本リーフレットでは、みやびな川編として、千年の都・京都の東北部を流れる高野川をとりあげた。

本ブックシリーズが、琵琶湖・淀川流域の河川に親しみを感じ、流域を散策するための一助になることを願っている。

### 目次

ねらい・目次	
高野川の概要	02
隠棲の里・大原	03
コラム1 大原の紫蘇としば漬け	05
コラム2 大原御幸	08
修学院・一乗寺の寺社づくし	09
コラム3 高野川の水質	10
コラム4 若狭街道と出町柳	14

### CONTENTS

## 1 高野川の概要

高野川は、京都市左京区と滋賀県大津市の境になる途中越えの南部に源を発する門跡川を源流として、三谷峠を水源とする三谷川を合流し小出石町で高野川となる。流路延長23km(国交省管理区間18.9km)、流域面積46.6km<sup>2</sup>の淀川水系の一級河川である。

日本後紀(840、承和7)年の卷八延暦十八年(799)八月己卯「禊於埴川(はにがわにおいてみそぎ)」の埴川は、高野川のことと言われる。埴とは質の緻密な黄赤色の粘土のことで、瓦・陶器などの焼き物を作ったり、また衣に擦り付けて模様を表した。この埴を高野川沿いで産した。黒川道祐の雍州府志(1686、貞享3年)には、「・・・叡山の麓を過ぎ、高野村に出ず。依りて、高野川と号す。・・・」と記されている。

大原盆地では、大尾山を源とし三千院の北側を流れる律川と小野山を源とし三千院の南側を流れる呂川を左岸に合流し、さらに翠黛山の北に発し寂光院の南側を流れる草生川を右岸に合流する。その後、亀甲谷川など多くの支川を合流しながら上高野の花園橋下流で岩倉地域を南北に貫通する岩倉川を右岸に合流し、松ヶ崎橋の上流左岸で比叡山の麓に源を発する音羽川を合流する。高野地域を貫流した後、出町の賀茂大橋上流で賀茂川と合流し鴨川となる。鴨川はYの字形で京都を流れる

が、その右上側が高野川である。

高野川 河原のかなた 松が枝に  
かはせみ下りぬ 知る人の家  
(与謝野晶子、歌集「舞姫」)



高野川流域図

(表紙写真/修学院付近の高野川)

## 2 隠棲の里・大原

大原の里は、京都御所から直線約12km離れた周囲を山に囲まれた小さな盆地である。京都市内から高野川沿いの**若狭街道**(国道367号線)を進み、京都バスの大原終点で降りると**大原盆地**が目の前に広がる。北側には市立の小中一貫校の**京都大原学院**、西に行くと**寂光院**、京都からの唯一の道で若狭に抜ける若狭街道を東に横断すると**三千院**などがある。観光客で賑わうようにもなったが、しかし一歩離れると昔と変わらない念仏の修行の地であり、貴人の隠棲の地としての鄙びた雰囲気を今に伝えている。

東側の**呂川**沿いを歩き、左に三千院の参道を見て、更に進むと山の際に**勝手神社**がある。1125



大原の里



呂川



勝手大橋と律川



浄蓮華院



来迎院本堂



音無の滝



観光客でにぎわう三千院への道

(天治2)年に良忍が**声明**<sup>しょうみょう</sup>道の守護神として大和多武峰より勧請したという。更に進むと、**浄蓮華院**がある。宿坊として観光客などを受け入れている。続いて**来迎院**がある。仁寿年間(851~854)年に、円仁が勝林院と並ぶ仏教音楽の天台声明<sup>しょうみょう</sup>の道場として建立したと伝えられる。その後衰退したが、1109(天仁2)年に良忍が再興し、天台声明の根本道場として栄え現在にいたっている。良忍は、魚山声明を大成した中興の祖であり、また後に融通念仏を創始した開祖でもある。融通念仏とは、「一人の念仏が万人の念仏に通じる」というもので、江戸時代に融通念仏宗となった。

大原は魚山<sup>ぎょざん</sup>と呼ばれ、天台魚山声明の発祥の地である。声明とは、日本では仏を讃える歌謡や経を読む音律として拡がり、仏教のほか民謡などの日本音楽にも大きな影響を及ぼした。

さらに山道を500mほど進むと**音無の滝**に着く。**律川**の上流である。呂川と律川の名前は、声明の施法の呂と律にちなんで名づけられた。調子はそれを「呂律が回らない」というのも、これが語源である。良忍上人がこの滝に向かって声明の修行をしたとき、初めは声明の声が滝の音に消されて聞こえなかった。しかし、練習を積み重ねると滝の音と声明の声が和し、ついには滝の音が消えて声明の声のみが聞こえるようになった。このことから音無の滝と名づけられたと言われている。

小野山の上より落つる滝の名の

音無しにのみぬる袖かな (西行)

道に戻ると三千院である。三千院は、「京都 大原 三千院 恋に疲れた女がひとり・・・」で始まるデューク・エイセスの「女ひとり」でも有名になった。紅葉の季節には観光バスなどで多くの人々が訪れる京都の観光地の一つである。延暦年間(782

～806)に天台宗の最澄が比叡山南谷に円融房を建てたのが三千院の起源である。その後、寺名と場所を移しながら1871(明治4)年に大原に移り三千院と称するようになった。天台宗五箇室門跡寺院の一つである。

本堂の**往生極楽院**(国重文)は1148(久安4)年の建立で、井上 靖は「・・・有名な往生極楽院の建物を見た。・・・お堂というより、東洋の宝石箱とでもいい簡素なこじんまりした美しさである。」(「昨日と明日の間」)と書いている。堂内の**阿弥陀三尊像**(国宝)は平安後期の彫刻を代表する傑作である。脇侍の両菩薩は大和坐りで少し前屈みに跪いているのがやさしさを感じさせる。



三千院



往生極楽院



律川に架かる未明橋



律川



後鳥羽天皇と順徳天皇の大原陵



勝林院



実光院



宝泉院



落合の滝

北に行き律川に架かる**未明橋**を渡ると、右側に後鳥羽天皇と順徳天皇の両陵が並んでおり、**大原陵**と呼ばれる。承久の乱で敗れた後鳥羽上皇と順徳上皇は、それぞれ隠岐、佐渡に流され没したが、遺骨がここに運ばれ埋葬された。道の正面に**勝林院**がある。勝林院は天台声明の道場として835(承和2)年に円仁が創建、1013(長和2)年に寂源が再興して勝林院と称した。天台声明発祥の寺である。

勝林院は1186(文治2)年に、天台宗の顕真が浄土宗祖の法然を招き、専修念仏について100日間の論議をした「大原問答」が行われたところとして有名である。本尊の阿弥陀如来は大原問答の際に、手から光明を放ち念仏の衆生済度の証拠を示したといわれ「証拠の阿弥陀」と呼ばれる。すぐ側にある塔頭の**実光院**は学僧が住む寺として、**宝泉院**は声明の道場として寿永年間(1182～85)に創建された。

京都バスの大原終点を西に**草生川**の上流に向かって歩くと寂光院への道である。道路沿いの草生川に小さな滝がひっそりとある。**落合の滝**である。

ころころと 小石ながるる谷川の

河鹿なくなる 落合の滝 (建礼門院)

## コラム① 大原の紫蘇としば漬け

大原は四方を山に囲まれた盆地のため昼夜の寒暖の差が大きく、早朝には「小野霞」と呼ばれる霞がたなびき適度の湿り気を土地にもたらす。このような気候は香り豊かで鮮やかな良質の赤紫蘇を収穫できることから、赤紫蘇は大原の特産となった。この赤紫蘇を原料として「しぼ漬け」が生まれた。茄子に赤紫蘇と塩を加えて樽の中で長期に熟成し乳酸醗酵させて作られる。乳酸菌による酸味が特徴である。800年以上も前から大原で作られてきたと言われている。しぼ漬け、すぐき、千枚漬は京の三大漬物として有名で、京の食文化における伝統の味を形作ってきた。

最近、みょうがやきゅうりを混ぜたりして酢漬けで大量生産もされるようになった。乳酸醗酵のものを生しぼ漬けとして区別することもあるが、どちらもしぼ漬けとして親しまれている。しぼ漬けがテレビのコマーシャルで流されてから、今では全国的に知られるようになり、全国ほぼどこでも販売されている。



しぼ漬け



紫蘇畑

寂光院手前の坂道を登ると**建礼門院大原西陵**である。隣接して**寂光院**がある。寺伝では、594(推古天皇2)に聖徳太子の創建という。寂光院で隠棲した建礼門院徳子は平清盛の娘で高倉天皇の中宮、安徳天皇の生母である。1185(寿永4)年に壇ノ浦で平家一門が滅びた後、尼となって平家一門と高倉・安徳両天皇の冥福を祈って終生をこの地で過ごした。2000(平成12)年の放火によって本堂が焼失したが、2005(平成17)年に再建された。

草生川を挟んで**翠黛山**の中腹に建礼門院に仕えた阿波内侍(藤原信西の息女)などの墓が青苔に覆われ昔のまま並んでいる。京の都に柴や薪などを売り歩いた**大原女**の装束は、阿波内侍が山野で働いたときの作業着姿が原形という。10月22日に行われる時代祭の中世婦人列でその姿が見られる。

若狭街道を1km下って**野村別れ**の西に**里の駅・大原**がある。地元産の野菜や手作りの食物などを販売している。野村別れから東に山に向かうと、山麓に**惟喬親王墓**が一つ淋しくある。すぐ横の**小野御霊社**は親王を祀っている。惟喬親王は文徳天皇の第一皇子であったが、母が紀氏の出身のため藤原氏をはばかりて皇位につかず出家し、25年間を大原に隠棲して没した。惟喬親王にまつわる遺跡は雲ヶ畑、近江など京の都の外れに多く残



建礼門院大原西陵



寂光院本堂



草生川紅葉谷



阿波内侍墓(右端)



高野川(大原)



里の駅・大原



惟喬親王墓への階段(左)と小野御霊神社(右)

されている。

更に若狭街道を1.5km下ると**花尻の森**で、大原の南の端である。藪椿が多くあり春には落椿の名所となっている。花尻の森には**江文神社御旅所**があるが、もとは



惟喬親王墓



江文神社御旅所



花尻の森の落椿

小野源太夫社があり松田源太夫の屋敷跡だったという。若狭街道が大原へのほぼ唯一の道であるから、松田源太夫は源頼朝の命を受けここで寂光院の建礼門院を監視していたと言われている。

## コラム② 大原御幸

1185(寿永4)年に平家一門は壇ノ浦で滅亡した。翌年の1186(文治2)年に御白河法皇は、子供である高倉天皇の中宮であり壇ノ浦の戦で生き残った建礼門院を大原寂光院に訪ねられた。平家物語灌頂巻の大原御幸である。大原に行く若狭街道は監視されていた。そのため監視の目をくぐるため、夜の明けないうちに北に鞍馬街道を進み静原から江文峠を越えての遠回りをされた。夏草の茂みを分け入り人跡の絶えた道を進むのも哀れであったが、ようやく西山の麓にある寂光院に至られた。法皇は庭の池に浮草がただよい、錦をさらすかのようなのを見られて、

「池水に みぎはのさくら 散しきて  
なみの花こそ さかりなりけれ」と詠まれた。御庵室に入られて障子を引き開けて御覧になられると、建礼門院の御製とおぼしき歌があった。

「思ひきや み山のおくに 住ひして  
雲の月を よそに見んとは」

建礼門院は山での花摘みから帰って来られて、後白河法皇の来訪を聞き戸惑ったが、阿波内侍に促されて対面された。後白河法皇は建礼門院の変わり果てた姿を見て憐れんだが、建礼門院は自らの運命を仏教の世界観である六道になぞらえて語られた。物語のテーマである「諸行無常」を象徴する場面である。



寂光院

### 3 修学院・一乗寺の寺社づくし

修学院から一乗寺にかけての寺社は紅葉の名所である。修学院の地名は、古代叡山三千坊という比叡山山麓一帯に建てられた多くの寺の一つであった修学院にちなむという。修学院の赤山の麓にある**赤山禅院**は、888(仁和4)年に第三世天台座主 円仁の遺命によって安慧(あんゑ)が創建した。

赤山禅院は平安京の東北に位置する。また、本尊である天台宗守護神の赤山大明神が陰陽道の祖神とされるので、表鬼門を守護する方除けの寺として信仰された。また、商売の神で毎月5日のご縁日詣でから、「五十払い」という商習慣ができたと伝えられている。修学院離宮の造営で知られる後水尾天皇から「赤山大明神」の勅額を賜っている。赤山禅院が創建される以前には、平安初期の



修学院離宮道と比叡山の麓を流れる音羽川



赤山禅院



赤山禅院の拝殿屋根の鬼門除けの猿



修学院離宮



2階が鐘楼の禪華院山門

大納言であった<sup>みなふちのとしな</sup>南淵年名の小野山荘があり、877(貞観19)年に催した<sup>しやうしえ</sup>尚齒会が日本における敬老会の始めとされる。

南に行くと**修学院離宮**がある。優れた文化人でもあった後水尾天皇が紫衣事件などで譲位後の1656(明暦2)年から自ら設計・監督をして造営した。28万㎡の広大な自然風景的な借景式庭園の離宮で、桂離宮と並び称される。更に南に行くと寛永年間(1624~44)年の創建の**禪華院**がある。2階が鐘楼になっている山門が珍しい。

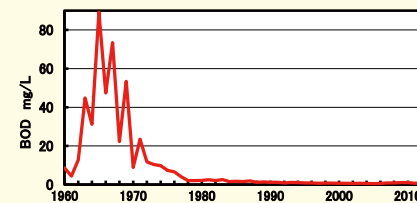
更に南に進むと比叡山山麓から流れ出る**音羽川**と交差する。後安堂橋を渡り、音羽川左岸沿いを上流に向かうと**雲母橋**がある。これを渡ると**雲母坂**である。比叡山への最短の道で、かつては京へ強訴する延暦寺の山法師が<sup>ひえ</sup>日吉神社の神輿を担

### コラム③ 高野川の水質

日本の復興と経済の高度成長期に呼応するかのよう、高野川でも水質は急速に悪化していった。河合橋(出町柳の賀茂川との合流直前の橋)で1961(昭和36)年度以降から急速に悪化し、1965(昭和40)年度が最高でBOD値89.2mg/Lとなっている。年平均値の値であるから、今では想像できないすさまじい汚濁と言える。昭和30年代後半から30数年間水質調査を実施した京都家政学園の高校生は、昭和40年前後の高野川の状況を次のように述べている。「高野川が、染色工場の排水と農家汚物の排水で日に日に汚れていく。私達の目でゴモクを川に投げ捨てている民家の奥さん連。毎日の採水の度に、ゴモクの山が至るところに見られ、河川の水の色は紫色がかっている。」

水質汚濁防止法の施行や住民・行政などの努力、下水道の整備によって、水質も徐々

により1984(昭和59)年度には1.6mg/Lとなり、以降2mg/L以下となった。しかし、晴天時の水質がきれいになったにもかかわらず、未だに川底がきれいにならない。雨天時における合流式下水道の雨水吐き口からの未処理下水の流入が主な原因と考えられる。



高野川河合橋におけるBOD年度平均値の経年変化

[資料提供:京都市上下水道局(高野川水質)]

いで下った坂である。花崗岩の土砂中に含まれる雲母が名前の由来という。音羽川は花崗岩地帯にあるため風化・侵食に弱く、たびたび修学院地区に土石流の土砂災害をもたらしてきた。ここから上流は、砂防技術とその歴史を見学・学習できる京都府が管理する砂防学習ゾーンとなっている。

道に戻って南に行くと**曼殊院**である。天台宗五箇室門跡寺院の一つである。延暦年間(782～806)に最澄が比叡山に一字を設けたのに始まり、1656(明暦2)年に現在地に移った。茶室八窓軒(国重文)や枯山水の書院庭園(国名勝)が有名である。紅葉の頃には多くの観光客が訪れる。

西にある**曼殊院天満宮**を抜けて**曼殊院道**を西に行くと、武田薬品の**京都薬用植物園**がある。薬用植物を中心に2,400種の植物を保有し「生きた薬草の博物館」となっている。さらに西に曼殊院道を進み道標に沿って右の小道を抜けると鎮守の森の中に**鷲森神社**がある。貞観年間(859～877)の創建と伝えられ、1689(元禄2)年に現在地に移った。修学院村の産土神である。鷲森という名は、古来から鷲は神使とされ、この鎮守の森に群れをなして住んでいたことに由来するという。

をりみるを見し鷲の森 すきかてに

わけきて今日は むかふ神垣 (霊元天皇)



後安堂橋から見た音羽川と松ヶ崎東山



雲母橋



曼殊院門跡



曼殊院の道



鷲森神社



曼殊院辨財天



武田薬品京都薬用植物園



修学院離宮内に架かっていた御幸橋 (鷲森神社)



葉山馬頭観世音菩薩



圓光寺



詩仙堂



八大神社

曼殊院道に戻って、南に進むと**葉山馬頭観音**があるが土砂崩れで閉鎖されている。幕末に攘夷運動で奔走した後、安政の大獄で捕らえられ病死した梅田雲浜が一時住んでいた。南に行くと西圓寺を経て**圓光寺**がある。1600(慶長5)年に徳川家康が伏見指月に建てた学問所が始まりで、1667(寛文7)年に現在地に移った。一時、南禅寺の尼寺であった。村山たかの墓がある。村山たかは京都の倒幕派の動向を井伊直弼に伝え、安政の大獄に手を貸したことで知られる。

南に突き当たると**詩仙堂**(国指定史跡)である。江戸前期の漢詩人の石川丈山が1641(寛永18)年に建て、30年間閑居した。中国の36詩人の画像に詩を書いた板絵を掲げた「詩仙の間」から名づけられた。時折、カーンと余韻を残して響き静寂感を深める鹿威し(添水ともいう)でも有名である。竹山道雄は「静寂の中に点をうって、そのために時間がひきしめられている。」(「詩仙堂」と述べている。

詩仙堂の向かいに一乗寺降魔不動明王がある。詩仙堂の東にあるのが**八大神社**である。一乗寺村の産土神で、1294(永仁2)年の創建と伝えられる。5月の神幸祭の剣鉾差し(市登録無形民俗文化財)が有名である。東の山道を登ると**瓜生山**の頂上近くに**狸谷山不動院**がある。平安京の鬼門守護として桓武天皇勅願により不動明王を安置したのが始まりである。現在は交通安全を祈る参詣者が多い。

詩仙堂まで戻り、西に進むと四辻に**一乗寺下り松**がある。ここは平安時代からの交通の要衝で、旅人の目印として植え継がれてきた。現在の松は4代目で、初代の古株は八大神社に保存されている。大きな**宮本・吉岡決闘之地石碑**が1921(大正

10)年に建てられた。宮本武蔵と吉岡憲法一門が闘ったという「一乗寺下り松の決闘」の伝説があるが、確証はない。

北に曼殊院道を進むとお茶所の穂野出がある。鷺尾家雑掌であった田辺家宅跡で旧態を残している。小さなもぎ茄子を白味噌で漬けた一乗寺名物の雲母漬を販売している。昔から比叡山に登る僧侶が賞味した味噌漬で、田辺家が1689(元禄2)年の創業以来の製法を守って手作りで製造しており、ここでしか売られていない。穂野出の向かいにある修学院児童館の庭に一乗寺趾石碑がある。一乗寺という地名の由来となった寺で、建立時期は不明であるが1063(康平6)年に上東門院彰子によって三井寺別院として堂宇が建てられた。1121(保安3)年に延暦寺衆徒によって焼き討ちされ、再建後には南北朝の戦乱で再び焼失し廃絶した。

一乗寺下り松から東に戻り、稱名寺の角を南に行くと西本願寺北山別院がある。天台宗の養源庵があったところで、1677(延宝5)年に浄土真宗として再興され1680(延宝8)年に北山別院となった。さらに南に行くと平安初期の創建と伝えられる金福寺がある。村山たかは、ここで出家して晩年を過ごした。金福寺は舟橋聖一が「花の生涯」で村山たかのことを書いてから有名になり季節のよい時には観光客が訪れるようになったが、それまで



剣鉾差し(八大神社)  
[写真提供：八大神社]



下り松古木(八大神社)



一乗寺下り松と宮本・吉岡決闘の地石碑



穂野出



きらら漬



一乗寺趾と元一乗寺小学校講堂



西本願寺北山別院



金福寺

はひっそりとした寂しい寺であった。与謝蕪村が再興した松尾芭蕉ゆかりの芭蕉庵や、蕪村、松村呉春(江戸後期の画家で四条派の始祖)などの墓がある。

三度啼て聞えずなりぬ 鹿の声 (蕪村)



高野川(前)と賀茂川(奥)の合流点(出町柳)の飛び石

## コラム④ 若狭街道と出町柳

若狭街道は鯖街道とも言われ、若狭から鯖などの魚介類を運んだ道である。鯖にひと塩して、一日かけて京都につく頃にはちょうどよい塩加減になっていたの、このように呼ばれた。福井県の小浜から熊川を通り、花折峠、途中越えを経て、京都の大原、八瀬に入り高野川沿いを出町柳に到って終点となった。ほぼ、国道367号線にあたる。出町柳からそれぞれ市中に運ばれた。

出町柳は山陰からの物資の集積点として古くから人と物資の交流が多く、交通の要衝として繁盛していた。それゆえ1895(明治28)年に開業した日本最初の路面電車である京電は、1901(明治34)年には青竜町(出町柳西詰)まで路線を延ばした。1925(大正14)年に営業を開始した京都市北部の鞍馬や八瀬

に行く叡山電鉄(エイ電)も出町柳を出発駅としている。1928(昭和3)年に始まった京都市によるバス事業も、最初の路線は出町柳と1924(大正13)年に開業した京都植物園間であった。1989(平成元)年には京阪電車が三条から出町柳まで延伸し、大阪都心まで直接つながりますます便利になった。



昭和7年頃の市バス(出町柳付近)

[写真提供：京都市交通局]